

Japanese Graded Readers

レベル別
日本語多読
ライブラリー



にほんごよむよむ文庫

レベル **4** vol.2

森鷗外^{もりおうがいたんべんしゅう} 短編集
高瀬舟^{たかせぶね} / 最後の一句^{さいごのいっく}



原作 = 森鷗外

簡約 = 栗野 真紀

挿絵 = 早川 修

監修 = NPO法人日本国語教育協会

にほんご よむよむ文庫 レベル 4

たか せ ぶね
高瀬舟

原作（げんさく）：森 鷗外（もり おうがい）

簡約（かんやく）：栗野 真紀子（あわの まきこ）

挿絵（さしえ）：早川 修（はやかわ おさむ）

監修（かんしゅう）：NPO 法人 日本語多読研究会（にほんご たどく けんきゅうかい）

<監修者紹介>

NPO 法人 日本語多読研究会 (にほんご たどく けんきゅうかい)

当研究会は、学習者のための「読みもの」を作ることを目的に、日本語教師が集まって、2002年1月に発足しました。2006年9月にNPO法人になりました。「レベル別読みもの」を開発したり、それらを使った「多読」の授業の実践・研究をしたりしています。http://www.nihongo-yomu.jp

レベル別日本語多読ライブラリー (にほんご よむよむ文庫)

[レベル 4] vol.2

森鷗外短編集 高瀬舟／最後の一句

2007年6月29日 初版 第1刷 発行

2011年6月15日 初版 第2刷 発行

原作：森 鷗外

簡約：栗野 真紀子 (日本語多読研究会会員・日本語教師)

作画：早川 修

監修：NPO 法人 日本語多読研究会

ナレーション：大山 尚雄／小金澤 篤子

録音・編集：スタジオ グラッド

デザイン・DTP：浅妻 健司

発行人：天谷 修平

発行：株式会社アスク出版

〒162-8558 東京都新宿区下宮比町 2-6

TEL.03-3267-6864 http://www.ask-digital.co.jp

印刷・製本：株式会社光邦

許可なしに転載・複製することを禁じます。

乱丁・落丁はお取り替えいたします。

©NPO法人日本語多読研究会 2007

Printed in Japan ISBN978-4-87217-644-5

にほんご よむよむ文庫 レベル 4

たか せ ぶね
高瀬舟

原作 (げんさく) : 森 鷗外 (もり おうがい)

簡約 (かんやく) : 栗野 真紀子 (あわの まきこ)

挿絵 (さしえ) : 早川 修 (はやかわ おさむ)

監修 (かんしゅう) : NPO 法人 日本語多読研究会 (にほんご たどく けんきゅうかい)

これは、今から二百年以上前の話である。その頃、人を殺す、家を焼くなどの重い罪を犯

した罪人は、死刑になったり、遠くの島に送られたりした。島に送られた罪人は、死ぬまでそ

こで暮らさなければならなかった。

京都に高瀬川という川があった。その川には、島に送られる罪人を乗せる高瀬舟が行った
り来たりしていた。罪人は、まず京都でこの舟に乘せられて、大阪まで運ばれるのである。

庄兵衛は、高瀬舟で罪人を運ぶ仕事をしていた。罪人が京都で舟に乘せられるとき、家族
が一人だけ、一緒に舟に乘ることができた。罪人は、大阪に着くまで家族といろいろな話を
する。これが、家族との最後の別れになる。「どうしてあんなことをしてしまったんだろう」「こ
れから私はどうなるんだろう」と、罪人は泣きながら、家族といつまでも話し続けるのだった。

ある春の夕方のことである。庄兵衛は、喜助という三十歳ぐらいの男を舟に乘せた。やせ
て色の白い男だった。喜助は家族がいないので、一人で舟に乘った。

喜助の罪は、弟を殺したことだった。罪人は、たいてい舟の中で泣くが、喜助は違っ

た。喜助は、黙って静かに月を見ていた。顔は明るく、目はキラキラ光っている。庄兵衛がいなかったら、歌でも歌い出しそうだと。庄兵衛は不思議だった。

——変だな。この男は、他の罪人とは全然違う。どうして、こんなに明るい顔をしているんだろう。自分の弟を殺しても何も思わない悪人なのだろうか。いや、そんなに悪い人間には見えない——

庄兵衛は、喜助の横顔を見ながら、ずっと考えていた。しかし、考えれば考えるほど、わからなくなった。しばらく経って、とうとう庄兵衛は喜助に聞いた。

「喜助、おまえは何を考えているのか」

喜助は「はい」と答えて、座り直して庄兵衛の顔を見た。庄兵衛は言葉をつづけた。

「私は、これまでたくさん罪人を舟に乗せたが、たいていの罪人は、夜中泣いて悲しがる。でも、おまえは島へ行くのが嫌ではないようだ。おまえは島へ行くことをどう思っているのだ？」

喜助は、につこり笑って答えた。

「島へ行くのが悲しいという人は、それまでの生活が楽しかったからでしょう。私は、これまで大変苦しい生活をしてきました。どこへ行っても、これ以上苦しい生活はないと思います。島のほうがきつと楽しいだろうと思うのです。それに、今まで私は、仕事があるところへは、どこへでも行つて働きました。一つのところに長く住んだことはありません。でも、今度は島にいろ、と言われました。やっと住むところができたので、うれしいのです。その上、島の生活のためのお金までいただきました。ここにございます」



喜助はこう言つて、着物の胸のところに手を置いた。そして、また言つた。

「私の両親は、ずいぶん前に病気で死んでしまいました。弟と私は、親切な村の人に世話をしてもらつて、今まで生きることができました。小さいときから、いろいろな家の手伝いをしながら一日一日生きてきましたが、一度も自分のお金を持つたことはありません。お金を借りてその日の食べ物を買う。そして、働いてそのお金を返す。また食べ物を買うためにお金を借りる。毎日このようにして生きてきたのです。」

ところが、罪人になつてからは、働かないのに毎日食べ物をいただきました。住むところも、お金もいただきました。自分のお金を持つのは初めてのことです。本当にこんなに親切にしてください。いいのでしょうか。私は本当にうれしいのです」

「そうか」

庄兵衛は喜助の答へに驚いて、これだけ言つと黙つてしまった。そして、考え込んだ。

——喜助は働いて金をもらつても、すぐまた、その金はなくなつてしまふと言つた。自分も喜助と少しも違わない。自分は、妻と四人の子どもと母の七人家族である。

自分じぶんは喜助きすけよりたくさん金かねをもらうが、もらった金かねを七人しちにんの家族かぞくのために使つかつて、後あとには少すこし

も残のこらない。そして、また働はたらいてお金かねをもらつて、家族かぞくのために全部ぜんぶ使つかう。喜助きすけと同じだ。

でも、氣持きもちちはどうだろう。喜助きすけは、毎日まいにち一生懸命いっしょうけんめい働はたらいて、やつと食たべ物を手てに入れると

いう生活せいかつをしてきた。そして、罪人ざいにんになつてからは、働はたらかないで食たべ物やお金かねがもらえるこ

とに驚おどろいて、それを心こころから喜よろこんでいる。しかし、自分じぶんは、自分じぶんの生活せいかつに満足まんぞくしたことは一度いちど

もない。心こころの中では、妻つまが金かねを使つかいすぎることを不ふ満まんに思おもつたり、仕事しごとがなくなつたらどう

しよう、病氣びやうきになつたらどうしようと不安ふあんに思おもつている。どうして喜助きすけのような氣持きもちちにな

れないのだろう――

庄兵衛しょうべゑは、人ひとの生いき方かたを考かんがえてみた。

――人ひとは病氣びやうきになれば、病氣びやうきがなかつたらいいと思おもう。ご飯はんが食たべられなければ、ご飯はんがあ

ればいいと思おもう。金かねがなければ、金かねを欲ほしがる。金かねがあつても、もつとたくさん欲ほしくなる。

人ひとはどこまでいつても欲ほしいという氣持きもちちを捨すてられない。だから、少すこしも樂たのしくなれない。

しかし、喜助^{きすけ}には、もっと欲しい、もっと欲しいという気持ち^{きもち}がない。だから、少し^{すこ}の金^{かね}でももらえば、それに満足^{まんぞく}して心^{こころ}から喜ぶ^{よろこ}ことができるのだ。それは、普通^{ふつう}の人^{ひと}にはなかなかできないことだ。喜助^{きすけ}は特別な人^{ひと}なのだ――

庄兵衛^{しょうべえ}は、喜助^{きすけ}の横顔^{よこがお}を見た。静か^{しず}に月^{つき}を見ている喜助^{きすけ}は光^{ひかり}に包まれているようだった。

「喜助^{きすけ}さん」

庄兵衛^{しょうべえ}は、今度^{こんど}は「喜助^{きすけ}」ではなくて、「喜助^{きすけ}さん」と呼^よんだ。喜助^{きすけ}は、そう呼^よばれて少し驚^{おどろ}いたようだった。庄兵衛^{しょうべえ}は続^{つづ}けて言^いった。

「お前^{まえ}が島^{しま}へ行^いくのは、弟^{おとうと}を殺^{ころ}したからだと聞^きいた。どうして殺^{ころ}したのか、その訳^{わけ}を聞^きかせてくれないか」



「はい、わかりました」

喜助は、小さい声で話し始めた。

「自分でも、どうしてあんなことをしてしまったのかわかりません……。去年の秋、弟が重い病氣になって、働けなくなってしまうたのです。私が仕事に出かけて、夕方、食べ物を買って家に帰ると、弟はいつも、『兄さん一人に働かせてすみません』と言っていました。

ある日、いつものように私が仕事から帰って家の戸を開けると、弟が『痛い、痛い』と言いながら、布団の上に倒れていました。私がびっくりしてそばに行くと、弟の首から血がたくさん流れていました。のどに剃刀が刺さっていました。弟は苦しそうに言いました。

『兄さん、ごめんなさい。私の病氣は、もう治らないのだから、早く死んだほうがいいと思つたのです。兄さんをこれ以上、私のために働かせたくない……。のどを切ったら、すぐ死ねるだろうと思いました。でも、うまく切れなくて……。痛い、痛い。兄さん、お願いだ。この剃刀を強く引いて。そうしたら死ぬますから……』



私^{わたし}が『医者^{いしや}を呼^よんでくる』と言^いうと、
弟^{おとうと}は、とても恐^{こわ}い目^めで私^{わたし}を見^みました。そ
して、『医^い者^{しや}が来^きても、何^{なん}の助^{たす}けにもなり
ません。ああ、苦^{くる}しい。早^{はや}く』と言^いうので
す。私^{わたし}はどうしたらいいのかわからなく
て、弟^{おとうと}の顔^{かお}ばかり見^みていました。『早^{はや}くし
ろ、早^{はや}くしろ』と、弟^{おとうと}の目^めが言^いっています。
弟^{おとうと}はとても苦^{くる}しそうで、だんだん声^{こゑ}も出
なくなりました。

私^{わたし}は、とうとう弟^{おとうと}の言^いうとおりにして
やろうと思^{おも}いました。そこで、『しかたが
ない。引^ひいてやろう』と言^いうと、弟^{おとうと}は、
うれしそうな目^めで私^{わたし}を見^みました。

私が力を入れて、のどの剃刀を引いたちようどそのとき、隣の家のおばあさんが家に入っ

てきました。私が留守の間、弟の世話をしてくれるように頼んでいたおばあさんです。おば

あさんは、私たちを見て『あつ』と言つて、外へ走つていきました。私は剃刀を持つたまま、

おばあさんが出ていくのをぼんやりと見ていました。弟を見ると、弟はもう死んでいました」

喜助は話し終わると、下を向いた。

庄兵衛は、どう考えたらいいのかわからなくなつた。

——これは本当に罪なのだろうか。弟を殺したことになるのだろうか。

弟は、喜助が剃刀を引かなくても、死んでしまつただろう。弟が、早く剃刀を引いてくれ、

と言つたのは、苦しかったからだ。喜助は、弟をその苦しみから助けたいと思つて、剃刀を

引いてやったのだ。これが本当に罪と言えるのだろうか。喜助は本当に島に送られなければな

らないのだろうか——

いくら考えても庄兵衛にはわからなかつた。

月の夜は、だんだん
深くなつていく。二人
を乗せた高瀬舟は、黒
い水の上を静かに進ん
でいった。



たかせぶね
● 「高瀬舟」

きょうと ふ 京都府
おおさか ふ 大阪府



さくひん
作品の
ぶたい
舞台



● 「最後の一句」

おおさか ふ 大阪府
あきた けん 秋田県



にほんご よむよむ文庫 レベル 4

さいご いっく
最後の一句

原作（げんさく）：森 鷗外（もり おうがい）

簡約（かんやく）：栗野 真紀子（あわの まきこ）

挿絵（さしえ）：早川 修（はやかわ おさむ）

監修（かんしゅう）：NPO 法人 日本語多読研究会（にほんご たどく けんきゅうかい）

い
ま
今から二百五十年以
にひやくごじゅうねんい
じようまえ
上、江戸時代の中頃
えとじだいなかごろ
のことである。場所は
ばしょおお
大
阪。ある日、桂屋太
さかひ
郎
兵衛を死刑にする、と書
べえ
かれた札が町に立てられ
ふだ
た
た。太郎兵衛は、船で
たろべえふね
物を運ぶ仕事をしてい
もの
はこ
る男であつた。その日、
おとこ
ひ
町の人々は、この話ば
ま
ち
ひとびと
はなし
かりしていた。

